

平成 22 年度「市長の秋葉区ミーティング」（区民）の概要

テーマ『地域と学校の連携について』

- ・日時 平成 22 年 8 月 5 日（木）
午前 9 時～10 時 30 分
- ・会場 秋葉区役所 601 会議室
- ・参加者数 7 名
- ・発言者数 7 名
- ・傍聴者数 14 名

【地域教育コーディネーター発言①】

満日小学校は全校児童が 66 名の小さな小学校で、休み時間やふれあいスクールでは学年・男女の隔たりなく一緒に遊んでいる姿をよく目にする。校区の世帯数は 400 軒にも満たなく、高齢化率も区内では 1・2 位を争うような子どもの少ない地域だが、地域のおじいちゃん、おばあちゃん世代を中心に、時間を作っては子どもたちと関わってくださっている。おばあちゃんたちは子どもたちと関わりとはつらつとした表情になっていき、地域と学校が手を取り合って、地域が元気に、子どもたちが元気という地域と学校パートナーシップ事業の目指す姿への理解が深まった感じがする。先生以外の大人が学習や活動に関わることで、子どもたちの学びが広がり、また、地域の方が学校に足を運んでくださることで、地域の方とのより良い関係が築かれる第一歩になっていると信じている。

一つの例として、月に 1、2 回、朝学習で地域の方に絵本を読んでいただく読み聞かせでは、回を重ねるうちに子どもたちは絵本に聞き入っている様子が見られるようになり、読み聞かせをしてくださる方のお宅に遊びにいったりした子もいた。

読み聞かせは学校の教育方針を受けての取り組みだが、地域の方と子どもたちが関わることで、お互いあいさつしたりなど、いい関係が築かれている。それが自然と子どもたちの見守りにつながり、子どもたちからも地域の方から大切に育てられていることに気づいてもらえるのではと思う。

これからも子どもたちの笑顔、学びの広がりや深まりのためにも地域と学校パートナーシップ事業を継続してほしい。

【新津地区公民館職員発言】

地域教育コーディネーターから地域で指導者的な人材がいなか、公民館に相談いただくことがある。公民館ではこれまでの情報やノウハウがあるので、話を伺ってできるだけ地域の方を紹介したいと思っている。それが学校や児童を見守ることにつながると思う。

【市長】

パイロット校のときから試行錯誤で地域教育コーディネーターをやっていただき感謝している。立ち上げのときの苦労が新しく地域教育コーディネーターになる方の貴重な知識になっていると思う。

それぞれの地域の特徴・特性を生かして、地域の方々から子どもたちへ愛情が注がれ、そして

自分の故郷が好きという子どもになってもらうことは、ありがたいと思っている。地域の中には、学校の先生では伝えられないこと、学校の先生では体験できない技能を持っている方がたくさんいるので、地域教育コーディネーターからそういう人材を発掘して学校につなげてもらいたい。

地域教育コーディネーターの制度を発足させるときに、内心、余計な負担が増えるのではないかと考えていた先生が結構いたのではないと思うが、1年目2年目の実績から学校側も歓迎すべきことだということが広がって、急速に学校から地域教育コーディネーターの配置に手が挙がったのではないと思う。

これをどうすれば全校配置、継続配置できるかということが一番の課題になってくる。例えば両川地区では同じ方が小学校と中学校の地域教育コーディネーターになっている。負担はあると思うが、小学校と中学校の情報交換での大事な人材になっているので、そのようにやっていただければ全校配置のハードルが低くなるのではないかと、両川小学校・中学校の取り組みを参考にしたい。

また、公民館から話もあったが、公民館を巻き込めば地域の人材バンクがより短期間でできるといったノウハウも蓄積している。公民館の一番大切な仕事は、公民館としては直接解決することはできないが、地域課題を解決できる人材を育てていく、あるいは地域課題を把握する人材を育てていくということではないと思う。これまで公民館職員と何回か意見交換して、年度内に公民館マニフェストという形で、新潟市の公民館が目指す方向を市民の皆さんに宣言することで作業を進めてもらっている。公民館も地域にとって更に役に立っていくので、地域教育コーディネーターの皆さんからも公民館と情報共有してほしい。公民館職員からも学校の教育現場でこういう問題があるのか、今の地域にはこういうことが大きな問題になっているのかということをよく知ってもらえば、学社民の融合、この場合の社は社会教育、生涯教育だが、そういう面で連携ができればお互いがよくなるのではないと思う。

【地域教育コーディネーター発言②】

新津第一小学校は児童数が500人弱で、商店街とその周辺の住宅地を校区としている。

当校では、米づくりの総合学習、地域子ども教室、読み聞かせ、サマースクール、学習支援ボランティアを地域の方からお願いし、地域教育コーディネーターはその窓口になっている。

この仕事に携わって一番感じたのが先生方の多忙さで、普段の先生方は授業を終えた後も教室に残り仕事をし、その後も会議や翌日の授業の準備など、夕方6時過ぎになってもほとんどの先生が学校に残っている。朝8時には学校に来て、昼休みをゆっくり取ることはできないと思うので、10時間は働いている計算になる。

例えば、今年は悪天候で中止となったが、昨年実施した校区外にある田んぼの観察会の事前の打合せは、先生、農家の方、公民館、民間のバス会社と延べ10時間以上にもなり、農家の方の忙しい時期と重なり、なかなか話が進まなかった。これを全て先生方が行っていたら大変な負担になると思った。

そんな忙しい先生方の負担が少しでも軽減できればと思いながら地域教育コーディネーターの仕事をしているが、活動をする上で困っているのが、地域教育コーディネーター担当の先生が新任教員の指導や青少年育成会、サマースクールの担当もしており、相談したいときに学校にいないことが多く、打ち合わせの時間がなかなか取れないので、なんとか配慮していただきたいと思

っている。

最後に、地域教育コーディネーターが入ることで先生方の負担が少しでも軽減でき、その時間と心のゆとりが子どもたちにいい形で現れたらいいと思う。

【市長】

新潟市は政令市になるにあたり教育ビジョンを策定し、教職員の負担感を軽減して本来やるべき仕事に集中できるようにすることを一つのテーマにしている。教職員が本来やるべき仕事とは、当たり前だが、学力の向上、体力アップ、子どもたちの心の面の見守りということになると思う。ここに集中してもらえれば地域における学校の信頼感は増していくと思う。

教職員がどんなことでエネルギーを使っているかという、例えば確信的に給食費を払わない親への対応では、それぞれの学校に任せてはいけけないのではないかと、教育委員会として対応することになっている。また、イヤな言葉だがモンスターペアレントへの対応もあまりにも程度を超えている場合は教育委員会として対応する必要があると思う。モンスターにまだっていない場合は地域の方に行事役になってもらえば、教職員の負担を相当軽減することができるのではないと思う。また、発達障害にできるだけ迅速に対応することが、学校全体の負担を減らすことになる。専門的な対応ができる先生、場合によっては医師がチームになって対応しないと、一つの学校で解決しなさいといっても難しい部分があるので、サポートチーム、サポートセンターを作って対応し、教職員の負担感をいろいろな部分で軽減している。

ただ一番の負担感、文部科学省、県教育委員会、市教育委員会からいろいろな報告を求められ、同じようなものが繰り返し来るといことで、それをできるだけ市教育委員会で東ねて学校に伝えるように力を入れている。まだまだ負担解消までは至っていないと思うが、学校の先生がいたずらに消耗しないようにしていきたい。

地域教育コーディネーターが機能してくれば、学校の先生方が大変助かるということも現実なので、校長先生に目配りをしてもらい配慮していくことも必要だと思う。

【地域教育コーディネーター発言③】

新津第二小学校は旧新津市の中心に流れる新津川沿いを校区とする児童 514 名の中規模校で、平成 19 年度から総合学習で、新津川や能代川の歴史を調べ、新津川をきれいにする学習を行い、地域の多くの団体や個人の方々から支援や協力をいただいている。

4 年生は地域の方から水害と戦いながら暮らしてきた歴史を学び、5 年生は能代川サケ・マス増殖組合からサケの稚魚をいただき新津川に放流したり、新潟薬科大学の学生から水質調査の仕方や水をきれいにする方法などを教わった。また掲示板で川を汚さないように地域に呼びかけたり、川に炭を入れて水を浄化する活動では、新潟地域振興局や地元の建設会社から協力をいただいた。クリーン作成では新津東部コミュニティ協議会、自治会からご参加いただいた。地域の方から学び一緒に活動することで、自分たちが暮らす地域を大切にすることが育ってきたと思う。

総合学習の他にも、運動会で踊る新津松坂を新津松坂協会の方に教わったり、教職員を退職された方の団体の新津地域教育会の方からは読み聞かせや昔遊びをしてもらっている。

今後も、子どもたちの活動を通して、いろいろな団体とネットワークを作り、共に元気になる活動ができればと考えている。

【市長】

その地域を知るといふ取り組みは、公民館でいえば地域学・地元学という部分だと思うが、本当に大切なことだと思う。新津川、能代川と関わる中で、新潟薬科大学の学生さんや地元の建設会社など、いろいろな方との関わりができて、それが人的ネットワークにつながっていく。旧新潟の公民館では、地域学・地元学では全国表彰を受けている大変優れた事例も多いが、学校にどのように応用していくかについて、公民館職員も学校の中に手は入れられないということではなくて、地域教育コーディネーターと意見交換をさせてもらい、公民館活動に生かしていく関係になれば素晴らしいと思う。

新津松坂協会から踊りを教えていただいたということでは、例えば亀田祭りでは子どもたちの参加が非常に少なかったが、それが今では子どもたちが大いに参加して盛り上げてくれるようになったと感謝されている。これは地域と学校があまりにも疎遠になっていたから起きているわけで、祭りが賑やかになる、祭りの後継者がつながっていくことは地域にとって元気が出ることなので、そういうものに学校が協力するのは当たり前ではないのかと思う。晴れの場でいきいきと活動して、それが子どもたちにとっても誇りになると、学習の力にも跳ね返ってくると思う。

今、学力の面で秋田の取り組みが注目されているが、地域から子どもたちが大切にされている、地域から子どもたちが育てられているということが理由の一つだと解釈するのが妥当ではないかと思う。地域に愛着を持つ子どもたちになっていくことが知力の面でも心の面でもいいのではないかと思うので、地域教育コーディネーターと学校の先生が連携しながら、総合学習という形で進めていただくことはありがたい。

【地域教育コーディネーター発言④】

阿賀小学校は新興住宅地と昔からの集落が混在した農業の盛んな地域で、校区には高速道路のインターや総合病院の建設があつたりと開発が進み、いろいろな人が地域に入ってきている。そのような中で、子どもたちが安心して地域で過ごせるようになるためには、地域の人との顔が見える関係が必要だと思う。そのためには、地域の方に学校に来ていただき、子どもたちと一緒に活動することにより、お互いの顔を覚え、地域に戻ったときに気軽に声をかけ合える安心・安全な環境づくりを目指していきたい。

今まであまり学校と関わりの少なかったおじいちゃん、おばあちゃんには、畑の先生や草取り、森や池の整備を手伝っていただいている。また、統合前の旧阿賀小学校は、坂口安吾の父・仁一郎氏の住宅の一部を校舎として使用していたこともあり、坂口家との関わりの学習では地域の有識者をゲストティーチャーでお迎えしたこともあった。その他に、総合学習で社会福祉協議会の方々に協力いただき、認知症サポーター養成講座の橋渡し役をさせていただいた。

今後も地域の方々からもっと気軽に学校に足を運んでいただき、子どもたちと接してもらえれば、安心・安全な地域づくりにつながるのではないかと思う。

【健康福祉課職員】

秋葉区では平成 21 年 3 月に「秋葉区地域福祉計画・地域福祉活動計画」を策定し、コミュニティ協議会や NPO 法人、関係するいろいろな団体など多くの区民の皆さんと一緒に地域

福祉の推進を目指し、取り組みを進めている。

子どもたちからも、この活動に参加していただけないかと思い、学校現場のニーズや協働できることを模索するため、昨年 12 月に初めて「地域教育コーディネーター情報交換会」に出席させていただいた。各学校の実践事例を聞いたり、地域福祉計画に基づくコミュニティ協議会主催の活動事例などを紹介したりすることで、お互いの活動や役割がわかり、少しずつ接点が見えてきた。

そんな中、阿賀小学校 5 年生の総合学習で福祉教育に取り組みたいという学校のニーズを地域教育コーディネーターさんが捉えてくださり、認知症サポーター養成講座として協働の取り組みにつながった事例も出てきた。講座の企画運営にあたっては、区と区社協が中心となり、学校の先生はもちろんのこと、地域包括支援センターや特別養護老人ホーム、デイサービスセンター、認知症グループホームと高齢者福祉施設の職員、また地域のボランティアさんなど高齢者に関わる多くの事業所・団体にご協力をいただいた。この講座の実施にあたり、より良い学習内容にするため打ち合わせを重ね、生徒が楽しく学べる授業を目指し準備を進めた。当日は子どもたちも一生懸命参加してくれ、終わったときのスタッフの顔には達成感と笑顔があふれていた。地域の事業所やボランティア、社協、行政が一緒になって学校支援ができたことは、とても嬉しくやりがいを実感できた有意義な経験になった。アンケートに記入された生徒の感想から、人を思いやる心が育まれていることを感じた。さらにこの講座を授業参観に設定していただいたことで、保護者の方々にも地域福祉活動を知っていただく機会となったことも大きな収穫だったと思う。

今後、この講座だけに終わらせることなく、学校や地域教育コーディネーターの皆さんと相談させていただきながら、地域の介護施設への訪問や学校行事にお年寄りから参加していただくなど、子どもたちが地域の人と関わる機会が継続できればと思う。また、保健福祉のセクションから発信し、様々な地域福祉のネットワークを活用して学校支援をしていく取り組みは多様な活動へ発展する可能性を秘めていると感じている。

これからも、子どもたちが、地域の一員として地域の課題に目を向け、自分ができていることを考えてやっていく、秋葉区のやさしいまちづくりに参加していく、そういった活動のきっかけづくりを、地域教育コーディネーターの皆さんのお力をお借りしながら進めていきたい。

【市長】

地域課題をしっかりと把握していくことが行政にとって一番大切なことで、新潟市全体でこれから最も大きな地域課題は何かと言われれば、高齢社会に対応することだと思う。高齢社会の中で地域の安心安全をどのように実現していくか、今や地域のまちなかに限界集落ではなく、限界コミュニティが誕生しつつあるのではないかと考えている。これから 5 年後 10 年後 20 年後、どのように高齢化が進んでいくのか、それをコミ協単位くらいで把握して市民の皆さんに見てもらおうと、今、福祉部長に作業をさせている。そうするとおそらく旧新潟島で限界コミュニティがこのように出てくる、田園・農村部もこのように出てくる、それにどう対応するのか、行政はもちろん頑張らなければならないが、行政だけではとても安心安全な暮らしは守れないので、区社協の役割、そしてコミュニティ協議会の皆さんに地域福祉というものを最大の課題として据えていただくという時期に来ていることを認識していただき、それに対応する地域の達人を育てていかないととても大変なことになると思う。

その一つが認知症サポーターということで、認知症の特徴などをよく知って、それを踏まえた対応をしていただける地域の方が必要だということで、認知症サポーター養成講座を数多く開き、認知症を支える専門的知識を持った方を育成させていただいている。子どもたちが大人になったときは高齢社会が現実のものになっているので、子どもを巻き込んだ総合学習で福祉教育をテーマにしてもらったことは大変素晴らしい取り組みだと思う。

行政でも公民館職員は最大の地域課題は高齢社会にどう対応するかということなので、それに少しでも役立つ人材を育成してもらおうということも公民館としても一番の課題に据えなければならぬと思う。そんな中で、区社協からは本当にいい活動をしていただき、安心安全の最前線は我々が守るというような意気込みを社協から感じることができるようになった。地域包括支援センターでも本当に頑張っている職員が大勢いる。その上で地域の達人をどんどん育てていかないと、未だかつて経験したことのない高齢社会を乗り切ることができないので、土台の数字を今年度皆さんに見ていただき、行政も一体となって考えさせていただきたいと思っている。

学校の方は適正配置審議会で、子どもの数がこれまで経験したことのない少子時代に入り、それを適正配置で当てはめると、ものすごい統廃合が必要だということを見てもらった。それは数字合わせにはしないということで、小規模校でも活性化させていくといった教育政策、例えば小中一貫校という考えや隣接する学校同士の連携を蜜にすることで小規模校のデメリットをなくすことが考えられないか、これから新潟市教育委員会として地域の方にできるだけ納得していただく教育政策を地域の方とキャッチボールをしていく段階だと思っている。

子どもたちの安心安全をどのように守るのかということも非常に重要なテーマで、地域のいろいろな方から目を光らせていただき、地域で防犯力をつける方が子どもたちにとっていいのではないかと思う。子どもたちの安心安全は地域で守るものということで、セーフティスタッフとして地域の方から頑張ってもらっている。高齢社会の中で、子どもたちの笑顔が広がっていくというのは難しいテーマだが、高齢者も子どもたちも出来る限り笑顔が広がるように頑張りたいと思う。

【地域教育コーディネーター発言⑤】

新津第五中学校では、生徒に望ましい職業観や勤労観を養うため3年の総合学習で職場体験活動を行っている。

体験活動の準備には、前もって地域の事業所に生徒の受け入れが可能かどうか電話をしたり、直接事業所を訪問したりといった協力をお願いする業務が加わるが、地域教育コーディネーターが配置される前は、3年生担当の教員が空き時間や放課後の時間を利用し事業所探しを行い、多くの時間と手間で大変な作業だった。昨年度から地域教育コーディネーターが関わらせていただき、今年は63の事業所でお世話になる確約をいただいた。全てスムーズというわけではなく、二人で作業しても、まとめるまでに1ヶ月くらいかかった。これだけ時間がかかった分は、教員の業務負担の軽減につながり、生徒達と向き合える時間が増えたのではないかと思う。また、私たち地域教育コーディネーターとしても地域の企業の方々とも関わりができて良かったと思う。生徒たちには、この体験活動を生かし、働くことのできる大人になってほしい、そして、いずれ地域に戻ってきて地域で働くことのできる、地域を背負っていける大人になってほしいという願いがある。

職場体験活動が国の施策の一つであることを、各地区の商工会や事業所団体の事務局などから

働きかけて、この活動をもっと理解していただくことができれば、子供たちに、学びの場として広がるのではないかと思います。

【市長】

63の事業所から受け入れ協力を得るといえるのはすごい苦労だと思うが、子どもたちが地域の企業に関心を持ち、商店街に関心を持つことはありがたいことなので、地域にはこういう職業があって、自分が大人になったら社会や地域に貢献しようと考えていく面で、大変いい総合学習なのではないかと思う。

中学生の総合学習は難しいという声があるようだが、一方では成功すると素晴らしい成果を挙げることはいくつか報告されている。例えば最近では宮浦中学が地域にある朱鷺メッセでガイドを行ったら、ビックリするくらい上手だった。それで面白くなって自信を得て、新潟のことを他の地域にも教えたいということで、京都・奈良に修学旅行に行ったときに、新潟がいかに素晴らしいところなのか、だからぜひ来てくださいという案内を行ったというのを聞いて、やり方によっては面白い効果が出るのではないかと思っている。新津第五中学校の職場体験も、そのような取り組みの一つに位置づけられていくのではないかと思う。地域経済が非常に厳しいので、とてもそんなことに付き合ってもらえないという企業もいるかもしれないが、我々も会議所や商工会から協力していただくようお願いをするのも行政の役割の一つではないかと感じている。

先日、毎年開催している教育フォーラムに参加し、地域教育コーディネーターや校長先生から、びっくりするくらいすごい取り組みが新潟市各地で行われていることを聞いて、そういう素晴らしい取り組みをリストのような形で閲覧、共有できる形になれば、今後、より負担が小さく地域教育コーディネーターの方が活動を開始してもらえる一つのヒントになるのではと思っている。そのときは、本当はここが大変だったということも聞かせていただきながら、その大変さをどう乗り越えたかというのが一番貴重な教訓になると思うので、その苦労もしっかり伝えられる仕組みも作っていききたい。

皆さんの取り組みを一過性のもので終わらせることなく、継続可能にして、地域教育コーディネーターを3・4年やられると、地域の達人になれる可能性が大きいのではないかと思うので、地域のリーダーとして大いに力を発揮していただき、地域との協働、コミュニティ力を生かした安心安全な暮らしを前進できるようにお願いしたい。

【地域教育コーディネーター発言⑥】

4年間地域教育コーディネーターを努めさせていただき、1年目2年目には見えなかった課題も見えてきた。今後も今まで取り組んでいることを行政や公民館、コミ協さんなどとさらに連携を深めて、充実させていきたい。

最後に地域教育コーディネーターは黒子であることを忘れずにいたい。今後も地域と学校パートナーシップ事業が継続していく前提で話させていただくが、地域教育コーディネーターは新潟市の嘱託という身分をいただき、学校の思いや願いを先生の代わりに地域に伝え、また逆に地域や保護者の声を学校に届けたりもしている。地域教育コーディネーターの個人的な思いや考えで行動しているのではないことを、地域の皆さんにも深くご理解いただくためにも今のままでいられたらいいと思っている。

【市長】

継続していくことが一番大事だと思う。この前も霞ヶ関、民主党、政党の方にもお願いしてきたが、今、国の施策は3年限定とか、手を挙げると3年で終わり、後は地方がやってくださいということで、これではとても続けられないと訴えてきた。学校の地域支援の考え方も、全部国が頑張ってくださいとは言わないが、国と一緒にやっていくことが必要だと思っている。国にお願いしながら、我々としてもどうすれば継続可能になるのか、皆さんから意見を聞きながら考えていきたい。